

ラスキンの職分經濟學 (中)

— Unto This Last の構造

大 熊 信 行

すでにわれわれは第一論および第二論において、『正義』の問題がラスキンの所説の根幹であることを承知した。たとへば雇主と労働者の利害對立の問題に關して、かれの説くところはすでに正義の問題であつた。あらゆる人間の行動の規準は窮極において利害得失の計量にあるのではなくて、『正義の計量』にあるといふのがかれの主張だつた。貧富關係の成立に關する根本問題も『抽象的正義』の問題に歸し、商取引の方法に關する問題もおなじく正義の問題に歸するといふことは、これもまた一應われわれの見たところであつた。しかるに第三論『地の審判者よ』にいたつては、前二論において顛頂をあらはしてゐた正義の問題が全面的に取扱はれた觀がある。しかも冒頭に引きだされたものは舊約の箴言すなはちソロモンの言葉であり、そしてソロモンの言に關する格言の解釋が第三論の出發點をなしてゐるといふにいたつては、多少なりとも理論的な分析の態度を延長してこれを追究しようといふ希望も放棄せざるをえない。われわれはしばらくラスキンの正義について説くところをその言葉のまゝ讀まなければならぬ。

貧富關係は神の定めた必然の法則であり、雷雲と雷雲とのあひだの放電のごときものである。その相互作用は種々なる形をとり、稔利で正當なものともなれば、癡癡的で破壊的なものともなる。そのいづれになるかは貧富

兩者の相見る光が神の光であることを互に知るやいなやにかゝる。その光といふのはソロモンの別な言葉では『義の日』“sun of justice”とも呼ばれ、それはその翼に醫す能をそなへて昇らんと約束されてゐるものである。この『醫す』の意味は『健康を與ふ、あるひは助ける、完全にする、あるひは合致せしめる』である。『けれど眞にこの醫すことは正義によつてのみ可能であるからである。いかなる愛も、いかなる信仰も、いかなる希望も醫すことはできぬ。人はまづ正しくなければ、愚かなる愛におぼれ、むなしき信仰をもつ。幾世かにわたつて最も善良な人が冒し來つた大きな過誤は、施物により、あるひは忍耐と希望とを説くことにより、あるひはその他あらゆる緩和慰撫の手段によつて、貧者を救はうとばかり考へ、たゞ一つ神がかれらに命じた正義によるべきことを考へなかつたことである。しかしこの正義たるや、これに伴ふ高德と仁慈とともに、最も善良な人々からさへ、いざといふ時には拒否されるものであり、大多數の人間からはいたるところで憎まれてゐるのである。それで、ひとたびその選擇が眞にかれらにゆだねられたとき、かれらは聖者と義者を拒み、殺人者で、暴動の元兇で、盜賊であるものを己れらに與へられんことを願つたのである。——生命の主の代りに殺人者を、平和の君の代りに暴動の元兇を、全世界の正しき審判者の代りに盜賊を願つたのである。』

こゝに注意すべきは、馬拉基書第四章第二節の『義の日』の語義に關聯して、ラスキンが二種の正義を説いた脚註の文章である。——『義の日』sun of justice は一層正確にいへば『正當の日』sun of justness である。しかし耳ざはりのわるい Justness といふ言葉の代りに古英語の Righteousness (『義』) といふ言葉が普通に用ゐられるため、godliness (『神聖』) といふ言葉と混同されたり、それに曖昧な間違つた意味が加はつたので、大抵の人はこの言葉のあらはれてゐる文章の眞の力を受けとることができないやうになつてゐる。Righteousness といふ言

葉は本來統治の正義 justice of rule すなはち right (『正道』) を指し、平衡の正義 justice of balance を指すところの Equity (『公平』) と區別されてゐる。さらに廣くくば Righteousness (『義』) は王者の正義 King's justice であり、そして Equity (『公平』) は判官の正義である。王は萬民を指導し、または支配する。判官は對立する兩者のあひだにあつて分配し、または判別を下す。さればこそ「誰が爾を立てて我儕の有司また刑官となせしや」といふ二重の問ひがあるのである。かくして選擇の正義(選擇すなはち比較的力量弱く、受動的な正義)に關しては、lex (羅・選擇す) から——[ex (羅・法律)、legal (英・法律の)、loi (佛・法律)、loyal (英・忠義な)]等の言葉がうまれ、支配の正義(指導すなはち比較的强大い、能動的な正義)に關しては、regis (羅・支配す) から——rex (羅・王)、regal (英・王の、王らしき)、roi (佛・王)、royal (英・王の、王統の)等の言葉が生れてゐる。と、これは今もいふごとく一つの脚註であるが、しかしラスキンの正義論の根柢を示したものであるから、ほとんどそのまゝ掲げておく。

さてラスキンは通俗の經濟學者が經濟學を屢々金持になる科學と簡單に呼んでゐるのにたいして、これを『合理的ないし正當な手段をもつて金持になる科學』The science of getting rich by legal or just means と解すべきであると提言し、この定義のなかの正當と合法といふ二つの言葉のうち、いづれが結局残らねばならぬものであるかといふ問題を提起する。或國では辯護士の助力をかりれば、決して正當でない行爲が合法となるやうな例がある以上、最後に残るべきものは合法の語ではなくて正當といふ語であらう。この一語が挿入されただけで經濟學の根本原理に著しい相違を生じてくる。なぜなら、科學的に金持になるためには正當に金持にならねばならぬこととなり、したがつて何が正當であるかといふ問題を解くこともまた經濟學の課題となるからである。さう

なると『經濟』economyといふものはたんなる學問 prudence によるといふのではなくて、法理の學 jurisprudence によるものだといふことになる。その法たるや人爲の法でなく、神の法である。それは尋常一様の學問ではなくて、あたかも天にあつて、永遠に『義の日』の光を見つめてゐるやうな學問である。さればこそこの學問に秀でた人々は、ダンテによつて永遠に鷺の眼の姿をして天にある星として表現されたのである。けれど、かれらは生きては光を暗から辨別した人々であり、全人類にとつては身の光なる眼として存在したのである。また同時に正義に力と支配とを與へる鷺の翼となつてゐる人々は、光をもつて天穹に『汝、地の審判者よ、正義にとりわけての愛を與へよ』といふ銘を書きしるしてゐる。——ラスキンはこの神曲の天國篇第十八曲に關説してゐるのであるが、右の銘がたゞ『愛』といはずに『とりわけての愛』diligent love といつてゐることに讀者の注意を乞うた。

しかしまたラスキンはいふ、絶對の正義は絶對の眞理とおなじく企及しうべきものではないと。かれのいはんとするのはかうである、——正しい人が正義を乞ひ求めることによつて正しからぬ人と區別されるのは、眞實の人が眞理を乞ひ求めることによつて虚偽の人と區別されるのとおなじだ。たとひ絶對の正義は企及しがたいとしても、生活の實踐上に役だつ程度の正義は、それを自己の目標とするすべての人々によつて企及しえられるものである。と、こゝにわれわれはラスキンの主張の最もよい意味での實際的な性格を見いだすことができるであらう。正義の觀念についての文學的な、鼓舞的な叙述、——『商を引き角を激して、高く秘音を發するが故に、衆敢て之に應ずる能はず』といふ河上博士の評語がそのまゝ當てはまるやうな叙述のあとで、かくも實際的な實踐的な領域にまつすぐ問題が引きもどされてゐるのは注目に値することであるが、こゝに見られる實踐的なものは

個人的な實踐の問題であり、國家の課題ではない。

實踐的な意味における正義の問題は、具體的にはまづ勞働の報酬に關する正義の法則は何かといふ問題を展開する。それは一般に交換における正義の法則は何かといふ問題を包括しなければならぬ。ラスキンにしたがへば、金錢の支拂は他人が今日われわれのために費す時間と勞力とにたいし、未來においていつでもかれがそれを要求するとき、それに等しい時間と勞力とを與へ、もしくは周旋してやるといふ約束である。いふまでもないが、これは一つの倫理説である。勞働の市場價格はこのやうな交換の倫理法則のあらはれではない。ラスキンによれば一定の勞働にたいする正當なる價格すなはち勞働の交換價值は人類の生産的勞働の等價量である。

右のやうな思想は自然につきのやうな見解を生む。——もしわれわれにして他人が與へた勞働よりも少い勞働をかれに與へることを約束したならば、われわれはかれに不足の支拂をしたことになる。もしその逆ならばわれわれは餘分な支拂をしたことになる。正當な支拂の中心的な原理は、『時間にたいするに時間を、力量にたいするに力量を、熟練にたいするに熟練を與へること』以外にはない。『正義は絶對の交換に存する。』

以上の見解は今日の讀者を驚かすに足るものだとおもはれるが、おそらく當時の讀者をも驚かしたことであらう。われわれはしかしイギリス古典派の經濟學と根本的に相容れない筈のラスキンが、それにもかゝらず物事の考へ方において根本的にイギリス的であり、かくも勞働價值思想の中流に坐してゐるのを奇異とも感じ、また甚だ興味あることと考へるのである。もとよりこれはリカードオ的な勞働價值の理論ではない。これは交換の倫理法則であり、支拂の道德原理である。われわれは一つの經濟問題に關する所説の本質が道德論や倫理説であるからといつて、それだけの理由で忽ち驚きを催す底の人々と立場を共にするものではない。むしろ經濟生活の諸

問題に内在する倫理問題の探求こそ今日以後の政治經濟學の新らしい課題であることを主張しようとするものであるが、しかし交換問題に關するラスキンの倫理説の簡單さにいたつては、その基礎をなす個人主義的理論の簡單さとともに、たゞわれわれを當惑させるといふよりほかはない。一言にしていへば、交換や支拂の倫理法則についてラスキンの考へたものは、單に倫理説としても子供じみたものであり、このやうな問題にとゞまるほどならばむしろわれわれは古代のギリシヤ哲學や中世の經濟思想に返るをもつて遙かに賢明であると信ずるのである。われわれはだから右の問題と關聯して述べられた前貸しや利息の問題についてもこゝでは觸れないこととする。

しかしこのやうなラスキンの交換原則も、これを反面からいへば近代の需要供給法則の否定であり、そしてこれは明白にそのことを述べてゐる。勞働にたいする支拂の公平または正義といふことは、同種の勞働の供給者の過不足によつて左右されべきものではないといふのである。もし諸君が馬の蹄鐵を一つ欲しいといふ。すると二十人あるひは二千人の蹄鐵工がそれを作りたいといふかもしれない。しかしその人數は實際にそれを作つてくれる一人への公平な支拂に影響を及ぼしてはならぬ。かれがその蹄鐵を作るのに生涯の時間のなかの十五分間と或る程度の熟練と腕力とを費したとすれば、諸君は公平をたもつためにこれと同等のものを、(前貸しにたいする支拂としてみれば、なほその上に幾分かを加へたものを)與へる義務がある。これが『報酬としての正當な支拂』なるものの『抽象理論』であるとなスキンは考へる。

さて、その實地の應用であるが、その場合にはもう一つの事實が考慮に入らなければならぬ。といふのは、現に受けとられた勞働は特定のものであるが、支拂にあてられる『勞働への命令』order for labour は一般的なもの

のである。通貨としての硬貨や紙幣は、實際上、どんな種類の労働にせよ、それだけの労働を國民にたいして要求した命令である。目前の必要にたいするこの一般的な通用性といふものは、特定の労働よりも一層大きな價值をもち、したがつかやうな一般的な労働の比較的少量にたいする命令は、特定の労働の比較的多量にたいする正當の等價物としていつでも受けとられるのである。いかなる職人でも、半時間またはそれ以下であらうとも國民的労働にたいする支配權を得るためには、喜んで自分の労働の一時間を提供するであらう。かゝる事情が一定の労働の適當な賃銀を通貨に引きなほして確定することを容易ならざるものとするのは事實である。ラスキンはそのらの事實をみづから指摘するのであるが、しかし依然として正しい人は正當な價格を支拂ふべきであるといふことを科學的の原則と定め、そのやうな價格の限界を確めることはできなくとも、できるだけそれに接近することを努めると説く。この倫理的な原則の實踐上の不確實性がラスキンを一向たちろがせないわけは、通俗の經濟學の原則においても價格の最高最低といふことが實際何であるかはわからぬながらに、最も安く買ひ、最も高く賣るといふことが科學的の原則として通用してゐるのを見るからである。

労働にたいする正當なる支拂についてのラスキンの理論は、なほしばらくその分析的な一面を展開する。——いま、かりに一定の労働のいかなる分量にたいしても、正當な賃銀が確定されたとする。そして二人の労働者と一人の雇主があり、雇主は一人の労働を求めてゐるものとする。不正な雇主が二人の労働者をして互に下値を張りあはせ、つひに正當なる價格の半額まで値切つて、一人を雇つたとする。一人は職をえられないのである。雇主は残つた半額を別種の労働の購入にむける。右と同様の方法で不當な賃銀率をもつて他の一人の労働者を雇入れるのである。するとそこにも一人の職をえられない労働者が残る。窮極の結果は、この雇主は自分のために二

人の男を半額づつで働かせて、そして職をえない男がやつぱり二人あるといふことになる。

つぎに正當な雇主の場合である。その場合は第一の仕事における二人の労働者の一人が職をえられないことは右とおなじであるが、職をえたものは仕事の代價の全額を受ける。雇主には第二の仕事のために別の男を雇ふ餘力はない。この場合は全額を受取つた労働者がその半額を用ゐて他の男を自分の仕事のために雇ふことができる。

——が、ラスキンのこのやうな分析とその前提とが、交換經濟の基本事實にたいする認識の方法として幾何の價值をもつかについて疑問のあることはいふまでもない。かれのいはんとするのはつぎのことである。しかもそれは右のやうな推理の歸結としてはじめて認むべきものなりや、なほ疑問であらう。いはく『正當な場合においては、一人は第一の雇主のため、もう一人は雇はれた男のために働くといふ風に、かくして勤勞の様々な上下の段階におよぶ。その効力は正義によつて促進され、不義によつて阻止される。したがつてそれについての正義の普遍的な恒久的な作用は、一個人の手にある富の多數の人におよぼす支配力を縮少し、人々の連鎖を通じてそれを分散するといふことである。富の發揮する實際の力はいづれの場合にも同一である。しかし不正によればそれはすべて一人の手中に集り、そしてかれの周圍にある一團の人々の勞働を、同時に、しかも同等の力をもつて支配する。しかるに正しい仕方によれば、かれは最も手近な人々にのみ接觸することができ、そして富の支配力はその人々を通じて次第に力を減じ、いろ／＼の心によつて變化をもあたへられ、さらに他の人々に移り、つひにその力を失ふにいたる。』と。

われわれは率直にいつて、以上の推理が何を意味するかを解するのに甚だ苦しむものである。しかし幸にしてこれにつゞく次ぎの所説は、ラスキンのいはうとした富の正義の觀念が何であるかを窺知せしめるには足る。——

いはく、この點に關する正義の直接の作用は、第一には贅澤品の獲得において、第二には道德的勢力の行使において、富の力を減ずることであると。そして勞働の報酬が不十分であるといふことは、向上の意志をもつた勞働者の地位の變更をも困難ならしめるのであるから、正當なる支拂は貧乏から生ずる無力狀態をも除去することになるのだと。

第三論の主題である正義の問題は、このやうにして勞働の報酬を中心とし、勞働にたいする正當なる支拂とは何かといふ問題に答へようとするものであるが、ラスキンは所有財産の不平等から生ずる所得不平等（これが富の不平等の一面である）の問題に觸れてゐない。かれみづから特異な見解と信じ、そして自信をもつて主張しようとしてゐるのは、あらゆる人間の勞務にはそれぞれの性質によつて一定の標準的な報酬といふものがある筈であり、殊に各種の高級な勞務には、歴史的に定まつたところの、動かすべからざる報酬があるといふことである。それはその人の能力の如何によつて變更されべきものではなくて、むしろ職そのものに固有なる定率である。またそれは、その職を欲する人間の多寡や競争の有無によつて變更されべきものでもない。あくまで職そのものに固有の定率は守られねばならぬ。無能なものや下手なものを安く雇入れることも不正であり、競争者の多い者を値切つて雇入れることも不正である。とすれば反面においてこの議論は、一部の人間が使用されずに放置されることを容認するもののやうであるが、ラスキンは明かにこれを容認する。かれはあらゆる種類の勞働ないし勞務の價格（報酬）が、それぞれ上下の階層をもつて一定不變の標準を維持すべきことを主張し、採用不採用の如何は雇主の自由であるとしても、右の標準を崩してはならぬといふのである。一見してこれは極めて奇異な思想のごとくである。が、官吏・軍人その他公職の俸給といふものは、一般にそのやうなものであるといふ事實をこゝで

想ひださなければ、われわれはラスキンの思想の根據と根源とに觸れることができないであらう。

この思想はすでに第一論にあらはれたものであり、かれが『總じて勞働に關する自然にして正當な制度は、すべて勞働は一定率をもつて支拂はるべきもの、但し上手な職人は用ゐられ、下手な職人は用ゐられないといふにある』と述べてゐることは、その場所で見たとほりである。しかしこの原理が樹立されるためには勞働の組織化が必要であるといふこともラスキンの根本見解であつた。

ラスキンはなほ貧民の運命および人口過剩の問題にも接近するが、最後にかれ自身の思想と社會主義思想との對照をもつて第三論を結ぶ。この一論は社會主義の主張に著しく接近してゐる一面があるので、かれは讀者の不安を一掃しようとする。——そも／＼社會主義は社會のいかなる部面に發生したか？ 右に述べた報酬の原則が實際に行はれてゐるのは陸海軍においてであり、反對の原則が行はれてゐるのは工場の職工のあひだにおいてである。社會主義が發生したのは後者においてである。と、これは原文の通りではないが、この立言は生彩を帯びてゐる。さらにラスキンはつぎのやうにいふ、——『わたくしの全著作を通じて、いづれの點にもまさつて屢々力説してきた点があるとすれば、それは平等の不可能といふことである。わたくしの不斷の目的は、或人々の他の人々にたいする、時には一人のあらゆる他の人々にたいする、永遠の優越を示すにあつた。さうしてそのやうな人または人々を選任して、その卓越した知識と賢明な意志とにしたがつて、多數の劣等者を指導し、時によつては強制し、服従せしめるがよいといふことを示すにあつた。わたくしの政治、經濟學の諸原理は三年前マンチェスターで述べた簡單な一句に含まれてゐる、「劍の兵士のあるがごとく鋤の兵士もあるべきである」と。また「近世畫家論」最終卷の簡單な章句にもいひ盡されてゐる、——「統治と協力とはすべての事物において生命の法則で

あり、無政府と競争とは死の法則である」と。』

ラスキンの思想は近代の社會主義思想と對立するのみではない、それらを含めて近代の民主主義・自由主義・個人主義・合理主義思想の全體と對立するものを含むのであるが、それは右に引用したやうな二三の命題からうかゞはれるであらう。この思想はまただゞちにカーライルに通じるのである。劔の兵士のあるごとく鋤の兵士もあるべきだといふ思想は、しかしそれだけでは決して反社會主義的ではない。社會主義者もまた同じ命題をいふかもしれない。無政府と競争とは死の法則であるとは、これもまた決して反社會主義的ではない。むしろこれこそはすべての社會主義者の異口同音にいはうとするところである。われわれはしかしかれが『平等の不可能』を殊更に力説してやまないところに、そしてその根據を人間的素質の先天的な不平等に求めるところに、しかもなかにづゝかれみづから社會主義者と一致するものではないと言明したところに、かれが實際社會主義者ではないといふことの最善の證據を見るのである。ラスキンをして社會主義に改宗せしめることを結局においてはごんだものが近代の社會主義要素の中にあるのであつて、それが何であるかはかれ自身に判明しなくともよい。ただかれの思想感情が事實として社會主義に一致しないのみならず、一致しないといふことをかれが表明せんと欲してゐるといふことが判明すれば十分である。かれは自由主義者ではない。さりとて社會主義者でもない。かれは自由主義の批判者であり、そして自由主義經濟改革の提唱である。しかもその改革の方向は社會主義の方向と似て異なるものである。かれの想念に泛んでゐた『勞働組織』の運用はいかなるものであつたか、それはまたかれが安全を害するつもりは毛頭ないといつた財産制度の問題といかなる關聯にあるのであつたか、殘念ながらラスキンの所説はこれらの問題を全體的な關聯において論理的に説いてはゐない。といふのはかれの所説は十分に體系的で

ないといふことなのであるが。

おもふに『地の審判者よ』と題するこの一論は、『此最後の者にも』に收められた四論のうち、比較的不出來の作であり、價值の疑はしい推理や讀者を當惑せしめる命題を伴つてをり、雜誌編輯者から連載を拒絶されなければならぬ原因を作つたものもおそらく先の二論以上にこの一論ではないかと、そんな想像さへうかぶものである。興味ある部分はむしろ第一、第二の兩論において多少とも展開されたものの再説に屬してゐるといふこともできるのであるが、たゞこゝに本文から離れて、たま／＼二つの脚註において、勞働および職業の本質に關して貴重な見解が披瀝されてゐるのをみのがすことができない。

正當なる交換比率の問題の基礎には勞働の量と質との問題があり、質に關聯して『熟練』skillの問題がある。『熟練』の交換價值または貨幣的評價はイギリス經濟學における價值論の一問題であるが、ラスキンはかれ自身の獨自な立場から『熟練』の意味をつぎのやうに論じた。いはく『わたくしは「熟練」といふ用語で經驗、知力および熱情が結合して手仕事におよぼす力を意味する。また「熱情」といふ用語では道德的感情の系列と作用との全幅を意味する。すなはち仕事の手際に連續性と精緻性とをあたへ、あるひは或一人をして他の人々より二倍も長く、疲れもせず、しかも能率よく、働くことをえせしめるところの單純な忍耐心と溫良性を初めとして、科學をして可能ならしめるところの品性上の諸資格や——（嫉妬心のために科學の進歩が阻止されてゐることは現世紀の經濟における最も著しい損失なのだ）——さらにすゝんでは藝術におけるすべての價值の最初の最大の根源であるところの傳授すべからざる情緒や想像力をも意味する。』と。われわれはこゝに美術研究家としてのラスキンの分析力が、にはかに生彩を加へてゐることを認めないわけにゆかぬ。人間の作業に關するかれの一般的

な分析を特徴づけてゐるものは道德的な見地であるが、このやうな見地は近代の科學のいづれかの一面に屬するものではなくて、種々なる見地を包含するものである。しかし注意を要するのはこれにつゞく次ぎの一節である。

ラスキンは經濟學における弘通の勞働概念にたいして疑問の矢を放つ。すでに第一論に見るごとく、經濟學の研究は人間の感情を計算から除外して成立すべきものではない。ミルが『純粹に生産的および物質的見地から見てさへも、單なる思考の重要さは無限である』と述べて、生産における思考の意義を十分に認めるほどに眞の手懸りを掴みながら、なぜそれにもう一つ、「單なる感情の」といふ一句を附け加へなければならぬことを悟らなかつたのかとラスキンはいふ。が、これはまだ第一論の延長である。しかるにミルの『經濟學原理』の冒頭における勞働の定義では、『自己の思考を特定の仕事に使用することに關聯せる或不快なる種類のすべての感情』が勞働の觀念のなかにふくまれてゐるといふ。これがラスキンの最も不思議と感ずるところで、なぜ同時に『或愉快なる種類の感情』をも勞働の觀念のなかに籠めてはならないのか、さうかれは反問する。『勞働を阻害する感情が勞働を促進する感情よりも、一層本質的に勞働の要素であるとは殆ど考へられぬ。前者は苦痛として、後者は能力として、報酬を受ける。職人は前者にたいして單に賠償を受けるにとどまるが、後者は仕事の交換價值の一部を生産するとともに、その量を實質的に増加する。』

だが、勞働に關するこの見解は、もう一つの脚註にあらはれてゐる職業に關する見解と對照されなければならぬ。ラスキンはいふ、——失業問題が難問題であることは何人も異存はないとして、いつたい問題は職業そのものにあるのか、生計にあるのか？ われわれが終熄せしめようとしてゐるのは人間の怠惰であるのか、飢餓であるのか？ 兩問題は別箇の問題である。兩者は前後して説かねばならないが、同時に扱つてはならぬ。人間は一定

の職業をもたずには精神および肉體の健康を持続しえないと。すなはちラスキンにしたがへば、職業的活動は生計のための手段であるといふことを超えて、それ自體が人間形成に缺くべからざる要因であり、かれの勞働觀はそのまゝかれの職業觀の基礎ではないとしても、兩者は關聯するのである。近代經濟學はその體系が理論的になればなるほど、勞働をもつて必至的に苦痛または犠牲と解するのであるが、その『理論的』とは因果論的といふことであつた。これに反してラスキンの『科學』は未分化のものである。

ラスキンの勞働觀および職業觀が經濟學的思惟を逸脱したものであるといへばそれまでであるが、かれの思索が、近代的な方法以前の未分化の状態において、つねに多くの問題を包括してゐることを認めないわけにゆかぬ。それは豊富なる生活直觀の地盤を反省せしめなければやまぬ。が、それにしても右の問題は第三論の中心をなすものではない。

第三論はすでに第一、第二の兩論においてそれらの根柢を支へてゐたところの正義の問題を主題とするものではあつたが、交換經濟における正義の原則を明かにしようとしたラスキンの方法はあまりにも不用意であつた。かれは交換經濟の機構を見なかつた。のみならずかれは勞働を見て資本を見なかつた。元來、この問題は財産および資本に關する一定の見解——道德的見解を離れて論じうべきものではない。最後の第四論はこの第三論の不成功を償はうとするもののごとくであり、われわれはそこでラスキンが氣構を新たにしてミルの經濟學に肉迫してゐるのをみるのである。